



## 気負わず、ためらわず

園長 野中 泉

つい何週間か前のこと。若い保護者と話していたら『大丈夫？』って聞かんといてほしいねん。『大丈夫？』って聞かれたら、『大丈夫』しか答えようがないのに、なんで聞くん？ってイライラする」と言われました。その時はたまたま私にむかって言われたことではなかったのですが、私もしょっちゅう誰かに「大丈夫？」と声をかけているなあと思い返しながら、その言葉を聞きました。しかも、逆から考えたら、私も人から「大丈夫？」と問われたら、条件反射的に「大丈夫」と答えてしまうなとも思いました。実際に大丈夫か大丈夫じゃないかは、関係なく。

もちろん、私自身の言い訳も含めて言えば、きっと冒頭の彼女に「大丈夫？」と声をかけた人も、辛そうに見えた彼女の姿を心配して、大丈夫じゃなかったら、一緒に考えるし、そばにいるよという寄り添う気持ちを伝えたかっただけだろうと想像できます。でも、だからこそ、難しいとも思ってしまいます。

一方で私たちは「言葉」などひとつもなかったとしても、誰かが、自分の深い孤独や悲しみに寄り添ってくれていると確かに感じられる瞬間もあります。

もう6年以上前のことになりますが、パートナーとの間にどうにも解決できない問題が起きて離婚することになったとき、私は小さな障がい者施設の施設長をしていました。私のいた施設は知的障害の子どもたちと大人たちが通う通所施設だったのですが、その中で「生活介護」というチームに通ってきていた人たちは、いわゆる最重度の知的障害のある成人の人たち、自発語はほぼなく生活のあらゆる場面で介助が必要な「なかま」たちでした。

離婚を決めたその日も、通常どおり勤務をしていた私は、ダウン症で重度知的障害の24歳のAさんのトイレ介助をしていました。ところが、ふくよかな彼女のオムツを持ち上げようとしゃがんで俯いたら、自分でも思いがけず込みあげるものがあり、涙がポロポロとこぼれてしまったのです。自分自身の涙が呼び水になったように涙が止まらなくなり、嗚咽しながらトイレ介助する私。するとオムツを履かせてもらう途中で、まだお尻を半分出したままのAさんが、突如私をがばっと引き寄せたのです。力の加減のない突然の行動に驚き、狭いトイレで彼女のふくよかなお腹に顔が埋まりそうになりながら必死で彼女を制止しようとした私は、次の瞬間、彼女が「うー、うー」と声を発しながら、私を抱きしめ背中をなででくれていることに気が付きました。知的水準はほぼ1歳半くらいだと言われているAさんが、何をどこまで理解していたのかは、知るよしもありません。ただ、わかったことは、泣いている私を彼女が慰めてくれようとしているという事実だけでした。そして、不思議なことにその時の私は、気の利いた慰めの言葉より深く、彼女に慰められたと感じたのです。

結局「大丈夫？」の代わりの言葉かけは何がよかったのか、まだ、わかりません。ネットで検索してみると、冒頭の彼女のように感じる人は世の中に少なくないのか、「大丈夫？」のかわりになる言葉を紹介する、いくつかの記事が見つかりました。でも、どれも、ああ、これが正解だなどは私にはまだ、しっくりきません。むしろ、もはや、声のかけ方に正解なんてないのではないかな。ぐるぐる考え続けています。

アトムでも、まだ「おしゃべり」が上手ではない0歳児や1歳児の乳児クラスであっても、誰かが泣いていると自然に寄り添う子どもたちの姿があります。泣いている友だちの顔を覗き込む子、頭をなでてやる子、自分の持っていたおもちゃを渡してやる子。仲良しの友だちが泣き止むまで心配そうに側をウロウロしている子。保育士に「あの子が泣いてるよ」と知らせにくる子。決して上手ではないけれど、心配でたまらない気持ちで友達の傍にいる。そこには、なんの気負いも、ためらいもないように感じます。

私もそうでありたいと、思いながらいます。